

2. 研究の詳細

プロジェクト名	教職志望学生の社会的能力育成プログラム開発		
プロジェクト期間	平成 24～25 年度		
申請代表者 (所属講座等)	高松 勝也 (教職実践講座)	共同研究者 (所属講座等)	小泉 令三 (教職実践講座) 山田 洋平 (教育支援課)

①研究の目的

本研究は、教職を志望する学生（以下、教職志望学生）が、就職後に学校で児童生徒、保護者、同僚教員等との人間関係を円滑にもてるように、コミュニケーション能力等を含めた社会的能力を身につけるための学習プログラムを開発し、在学中の学習効果を検討することであった。

本研究の背景には、文部科学省が重要な政策課題に挙げる教員の資質能力の向上への貢献がある。教員の資質能力を高めるためには、教科指導や生徒指導の実践的指導力を身につける必要があるが、その基盤にあるのは教員自身の児童生徒、保護者、同僚教員等と関わる際の社会的能力である。このことはまた、教員の精神疾患などのメンタルヘルスにかかわる問題を未然に防ぐための取組としても重要である。したがって、教員養成段階の大学（あるいは、大学院）在籍中に、将来教員となった時に職場で児童生徒を含めた周囲の他者と適切に関わり、職務を十分に遂行できるように社会的能力を身につける学習ができれば、資質能力の向上策に大いに貢献できると考えられる。

本プロジェクトの1年次（平成 24 年度）では、子どもの社会的能力の育成を目的に開発された SEL-8S (Social and Emotional Learning of 8 Abilities at the School: 学校での 8 つの能力を育成するための社会性と情動の学習) プログラム (小泉, 2011) の能力区分を参考に、教職志望学生の社会的能力を育成するための学習プログラム“Social and Emotional Learning of 8 Abilities for Teachers (trial)” (教職志望学生を対象とした社会性と情動の学習 (試案); 以下、SEL-8T (trial) とする) を開発した。8 つの能力と具体例は Table 1 の通りである。

平成 25 年度は、1 年次（平成 24 年度）のプログラム実施によって明らかとなった課題の解決に向けて、改良版 SEL-8T (trial) 学習プログラムを作成し、その効果検証を行った。学習プログラムの主な改善点は、実施回数を 5 回から 6 回に増やし、他者の考えを理解するために重要な「話の聞き方」を実施テーマに加えたことである。

Table 1 SEL-8T(trial)の 8 つの能力と具体例

基礎的な社会的能力	応用的な社会的能力
①自己への気づき (自己の対人関係への気づき等) ②他者 (児童生徒、保護者、同僚教員等) への気づき ③自己のコントロール能力 (情動の制御と活用等) ④対人関係能力 (あいさつ、良好な関係の維持等) ⑤責任ある意思決定能力 (諸条件を考慮して、結果を見通した自己決定の能力等)	⑥生活上の問題防止スキル (健康管理、法令順守等) ⑦環境や状況の変化への対処能力 (就職時のストレス対処等) ⑧積極的・貢献的な奉仕活動 (身近な他者への援助等)

②研究の内容、および③研究の方法・進め方

- (1) 学部生・大学院生対象の学習プログラムの試行版作成 (1 年次: 平成 24 年度)

SEL-8S 学習プログラムを参考に、学習プログラム試行版を作成した。

- (2) 少人数のグループでの試行 (1 年次: 平成 24 年度)

教職を希望する学生から希望者を 10 人程度募集し、作成した試行版の学習プログラムを実施した。効果の検討においては、ウェイトニング・リスト法で実験群・統制群を設け、実験法を用いた。

- (3) 学習プログラムの改良版の作成 (2 年次: 平成 25 年度)

実施した試行版の学習プログラムの効果および受講者のアンケートを参考に、改良版を作成した。具体的には、明らかとなった改善点から、試行版で実施した学習ユニットの修正を行い、さらに新たに作成する学習ユニットについては、改善点を考慮した学習内容を設定した。

- (4) 改良版の学習プログラムの実施および効果検証 (2 年次: 平成 25 年度)

改良版の学習プログラムを学部生・大学院生に実施し、効果を検討した。

④実施体制

研究代表者：高松 勝也（全体総括，学習プログラムの開発，効果検証）
共同研究者：小泉 令三，山田 洋平（学習プログラムの開発，効果検証）

⑤実施計画に対する研究の進捗状況

平成 25 年度の実施計画は，上記「②研究の内容，および③研究の方法・進め方」の（3）学習プログラムの改良版の作成，および（4）改良版の学習プログラムの実施および効果検証であった。

（3）については，平成 25 年 6 月～9 月に，1 年次（平成 24 年度）に実施した SEL- 8T (trial)学習プログラムの効果および受講者のアンケートを参考に，改良版 SEL- 8T (trial)学習プログラムを作成した。具体的には，明らかとなった改善点から，試行版で実施した学習ユニットについては修正を行い，新たに作成する学習ユニットについては，改善点を考慮した学習内容を設定した。

（4）については，10 月中旬から 11 月上旬にかけて，受講を希望する教職大学院在籍の大学院生 6 名を対象に，全 6 回の改良版 SEL- 8T (trial)学習プログラム(Table 2)を実施し，その効果を検討した。

Table 2 改良版 SEL-8T(trial)学習プログラムの学習ユニットのテーマおよび内容

学習ユニット(実施日)	テーマ	内容
第 1 回 (10 月 15 日)	初対面での話し方	教師や保護者に対して，適切な意思伝達や応対ができるように，伝え方や敬語表現を身につける。
第 2 回 (10 月 21 日)	話の聞き方	事実を知ることと相手の気持ちを理解することの違いを知り，適切な聞き方のスキルを身につける。
第 3 回 (10 月 22 日)	ストレス・マネジメント	ストレスには善玉と悪玉の 2 種類があることを知り，「善玉ストレス」の特徴を知るとともに，「悪玉ストレス」を解消するための有効なストレス対処法について学ぶ。
第 4 回 (10 月 28 日)	冷静に伝える	怒りが爆発するような場面でも，気持ちを抑えて冷静に状況を判断し，自分の主張が伝えられるように，落ち着く方法や柔軟な考え方，また気持ちを伝えるスキルを身につける。
第 5 回 (10 月 29 日)	ポジティブに考えよう	「うつ」の症状やその原因について学び，自他の体調や気分の変化に気づいて，適切に対処する方法を学ぶ。
第 6 回 (11 月 5 日)	ストップ！いじめ	いじめの具体的な場面を取り上げ，被害者や傍観者の立場からいじめを考え，トラブルの解決策を学ぶ。

⑥平成 25 年度実施による研究成果

【調査対象者】

A 県内の国立大学大学院教育学研究科（教職大学院）に在籍する大学院生 6 名（男性 3 名，女性 3 名）で，全員教職を志望しており，本研究には任意で参加した。

【調査内容】

①教師の社会的能力尺度（山下・小泉，2012）：教師が身につけるべき 8 つの能力（自己への気づき，他者への気づき，自己のコントロール，共感・開放性，アサーション，積極的・貢献的な奉仕活動，ストレス対応，自己確立）について尋ねた。全 27 項目について，「よく当てはまる（4 点）」から「当てはまらない（1 点）」の 4 件法で回答を求めた。

②学習内容実践化の意識調査：改良版 SEL-8T (trial)学習プログラムの各学習ユニット（全 6 回）のテーマを，教師の立場で児童生徒に対して指導することへの自信（効力感）について尋ねた。例えば，「冷静に伝える」の学習ユニットにおける質問項目は，「私は，気持ちや意見を適切に伝える方法を適切に指導できる」（予防教育），「私は，児童生徒同士のトラブルが起きた時，自分の意思を冷静に伝えるための指導ができる」（対処）であった。各学習ユニットに予防教育と対処の 2 項目ずつ全 12 項目について，「よく当てはまる（4 点）」から「当てはまらない（1 点）」の 4 件法で回答を求めた。

③学習ユニットの習熟度調査：調査対象者である教職志望学生が、改良版 SEL-8T (trial)学習プログラムの各学習ユニットを、どの程度習熟できたのかについて、a)学習内容の理解（“学習したポイントや授業内容がよく分かった”）、b)活動の参加状況（“授業中のロールプレイが上手くできた”）、c)教員としての活用意欲（“学習した内容を教員になった時に活用しようと思う”）、d)自己の生活における活用意欲（“学習した内容をこれからの自分の生活で活用しようと思う”）の4観点から調査を行った。各観点到1項目ずつの合計4項目について、「とても当てはまる（5点）」から「全く当てはまらない（1点）」の5件法で回答を求めた。

【調査時期】

調査内容①②については、全4回の質問紙調査を実施した。1回目は6月25日、2回目は学習プログラム実施前の10月5日、3回目は学習プログラム実施後の11月5日、4回目は12月10日であった。

調査内容③については、各学習ユニット終了後に質問紙調査を実施した。

【実施内容】

1回の学習ユニットは90分であり、前半の40～50分では教師に求められる社会的能力の育成、後半の40～50分では学習内容実践化の意識向上をねらいとする学習が行われた。

学習ユニットの前半部分の学習内容については、就職後に学校で遭遇する可能性のある児童生徒、保護者、同僚教員等との葛藤場面について、ロールプレイやゲーム、話し合いなどを含めたワークショップ形式による学習を行った。学習ユニットの後半部分は、小中学校版のSEL-8S学習プログラム(小泉・山田, 2011a, 2011b)の中から該当する学習ユニットの主活動部分について、授業者(著者)が教師役となって模擬授業を実施した。調査対象者は児童生徒役となり、模擬授業に参加した。この活動によって、調査対象者は、SEL-8S学習プログラムの学習ユニットでの主活動部分の進め方を体験的に理解することができる。活動後は、学習ユニットを実施する意義や実施上の留意点についての説明を行い、質疑応答の時間を設けた。

さらに、学習効果の定着や般化をねらって、学習ユニットのまとめ部分に日常生活での活用を促す声かけを行い、次の学習ユニットの導入部分には、必ず前回学習内容の活用状況の確認を行った。

【結果・考察】

本学習プログラムの実践効果を検討するため、教員の社会的能力尺度と学習内容実践化の意識調査の下位尺度項目の加算平均を下位尺度得点とし、下位尺度ごとに時期(4回)による1要因分散分析を行った。各尺度の平均得点と標準偏差、および分散分析結果をTable 3およびTable 4に示す。

まず、教師の社会的能力尺度については、いずれの下位尺度においても有意ではなかった。次に、学習内容実践化の意識調査の6つの下位尺度のうち、「話の聞き方」「ストレス・マネジメント」「冷静に伝える」「ストップ!いじめ」において有意差が認められた。学習効果を示した4つの得点の推移をFigure 1～4に示す。

以上の結果から、まず教師の社会的能力尺度ではいずれの下位尺度においても効果が認められなかった。平成24年度の研究成果(山田・小泉・高松, 2014a)における課題から、本研究では実施回数の増加および社会的能力を高めるための時間延長、学習効果の定着や般化をねらった声かけを行い、教師の社会的能力の向上を図ったが、結果は示されなかった。やはり山田・小泉・高松(2014a)においても指摘した通り、教職志望学生自身が教員に求められる社会的能力を向上させるためには、学習ユニットで学習した内容を体験できるような機会を設定することが必要であろう。つまり、本研究のように日常生活への定着や般化を促す声かけを行うだけでは不十分であり、例えば、時間外学習として日常生活での活用を促進する宿題を設定したり、実習やボランティア活動等と関連づけることで、体験できる機会が保証されるような工夫も重要と考える。

なお、教師や教職志望学生に求められる社会的能力について、小中学生向けを基本にするのではなく教職に関する社会的能力を明確にする必要があると考え、改めて構成概念をまとめた(小泉, 2014)。また、測定に関しても、この構成概念にもとづく項目設定にするために、今回使用した尺度の改訂版のための尺度項目を作成した。

次に、学習内容実践化の意識調査においては、本研究で扱った6つの学習テーマのうち、「初対面の話し方」「ポジティブに考えよう」を除く4つの学習テーマにおいて、学習プログラム実施前よりも実施後の学習内容実践化の意識得点が上昇した。特に、「ストップ!いじめ」については、平成24年度の研究成果(山田・小泉・高松, 2014)とは異なり、本研究では効果が示された。本学習プログラムの実施によって、「ストップ!いじめ」の指導に対する意識が向上したことは、学習ユニット内で扱う“問題解決の4ステップ”が、教職

志望学生にとって、いじめの問題を解決する1つの方法として理解できたためと考えられる。

以上のことから、本学習プログラムにより、概ね各学習テーマの実践に対する自信が高まることが示された。以下、本研究の分析結果及び国内外の心理学関係の関連学会で収集した資料等を元に、考察を行った。

本学習プログラムを受講した教職志望学生は、授業を通して各学習テーマの指導方法を理解し、実践に対する一定の自信が得られたと考えられる。この学習内容実践化の意識が高まったことは、本学習プログラムのような取組を導入・実践する際に、重要な意味を持つ。Dulak & DuPre(2008)は、子どもの社会性育成プログラムの導入と実践には、実践者の自己効力感 (self-efficacy) が一つの要因になることを指摘している。つまり、本学習プログラムのような取組が円滑に導入・実践されるには、取組を実施する教師自身が「この学習プログラムなら、自分にもできる。」「自分はこの学習プログラムを教える力がある。」というような学習プログラムに対する効力感を持っていることが重要となる。本研究で調査した学習内容実践化の意識が高まったことによって、教職志望学生が将来教員の立場で児童生徒の生徒指導上の問題への対応策の一つとして、SEL- 8S 学習プログラムのような予防教育を導入・実施する可能性が高まったと考えられる。

最後に、今後の課題を述べる。本研究では、調査対象者の通常授業や実習への負担を考慮し、約3週間に全6回の実施を行った。小中学生対象のSEL-8S 学習プログラム実践においては、1年間に7回程度以上の実施で、一定の学習効果が期待されることが示されている (小泉・山田・箱田・小松, 2013)。今回は、対象者の年齢や特性は大きく異なっているが、今後も引き続き、学習プログラムの実施回数についての検討が必要である。

また、本研究の結果において、家庭学習の設定や教育実習との関連づけを図ることによって、学習効果の定着や般化を促すことができる可能性が示唆された。今後、さらなる効果を得るためには、学習ユニットの実施の間隔を1~2週間に1回程度に広げて、その間の家庭学習を充実させたり、教育実習など社会的能力を活用できる活動との関連を考慮した実施計画を立案することなどの工夫が必要であろう。

Table3 教師の社会的能力尺度の平均得点と標準偏差, および分散分析結果

		1回目	2回目	3回目	4回目	時期の主効果
						F(3,23)
自己への気づき	M	2.89	2.67	3.00	3.06	2.67 n.s.
	SD	.16	.33	.27	.23	
他者への気づき	M	2.89	2.72	3.00	2.89	1.49 n.s.
	SD	.25	.23	.39	.16	
自己のコントロール	M	3.39	2.94	3.22	3.28	1.82 n.s.
	SD	.23	.45	.25	.23	
共感・開放性	M	3.83	4.00	3.94	3.94	1.00 n.s.
	SD	.37	.00	.12	.12	
アサーション	M	2.94	2.83	3.11	3.06	.59 n.s.
	SD	.36	.37	.46	.23	
積極的・貢献的な奉仕活動	M	2.78	2.67	2.89	2.89	1.20 n.s.
	SD	.37	.33	.53	.46	
ストレス対応	M	3.00	3.06	3.06	3.17	.66 n.s.
	SD	.19	.12	.23	.26	
自己確立	M	3.56	3.39	3.56	3.72	1.25 n.s.
	SD	.31	.30	.31	.36	

** $p < .01$, * $p < .05$

Table4 学習内容実践化の意識調査の平均得点と標準偏差, および分散分析結果

		1回目	2回目	3回目	4回目	時期の主効果
						F(3,23)
初対面での話し方	M	2.83	2.67	3.00	3.08	.80 n.s.
	SD	.69	.69	.65	.45	
話の聞き方	M	2.92	2.75	3.50	3.25	4.22 *
	SD	.34	.48	.50	.25	1・2<3
ストレス・マネジメント	M	2.33	2.25	3.00	2.92	7.56 **
	SD	.37	.25	.50	.34	1・2<3・4
冷静に伝える	M	2.50	2.17	3.17	2.83	4.55 *
	SD	.58	.37	.47	.37	2<3
ポジティブに考えよう	M	3.00	2.67	3.42	3.17	2.28 n.s.
	SD	.58	.55	.34	.37	
ストップ! いじめ	M	2.08	2.00	2.75	2.50	3.33 *
	SD	.45	.58	.48	.41	2<3

** $p < .01$, * $p < .05$

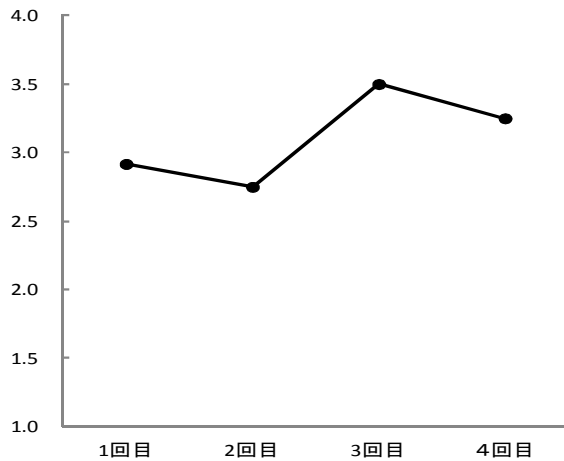


Figure 1 学習内容実践化の意識調査における「話の聞き方」得点の推移

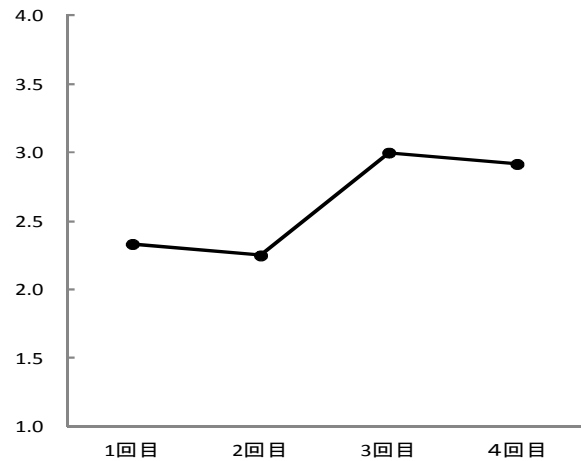


Figure 2 学習内容実践化の意識調査における「ストレス・マネジメント」得点の推移

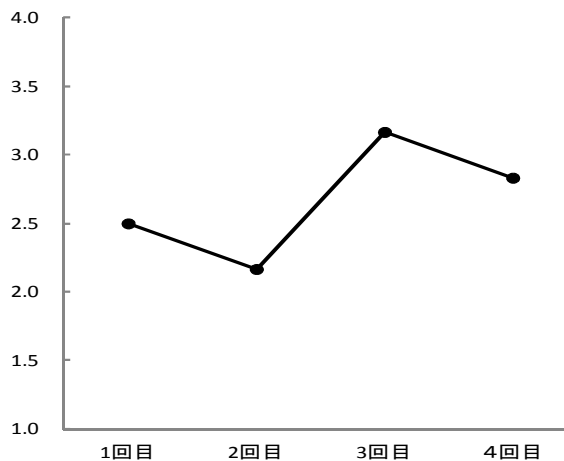


Figure 3 学習内容実践化の意識調査における「冷静に伝える」得点の推移

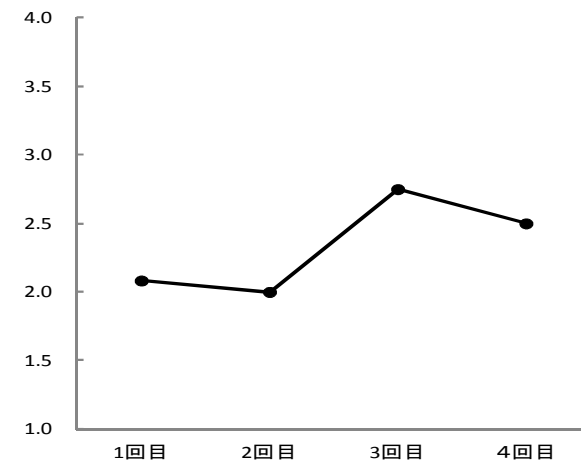


Figure 4 学習内容実践化の意識調査における「ストップ! いじめ」得点の推移

⑦今後予想される成果(学問的効果, 社会的効果及び改善点・改善効果)

本研究の結果から, 大学院だけでなく学部段階での教職志望学生の社会的能力を育成するための取組を進めることができると考えられる。具体的には, 改良版 SEL-8T (trial) 学習プログラムをもとに, 「教職志望学生のための社会性と情動の学習 (SEL-8T)」を開発する目途が立ったと言える。

⑧研究の今後の展望

今後, 「教職志望学生のための社会性と情動の学習 (SEL-8T)」の学習ユニットの内容と実施回数の工夫, および家庭学習の設定, 教育実習など社会的能力を活用できる活動との関連づけなどを考慮することによって, さらに効果が期待できる。また, 効果測定のために, 教員の社会的能力尺度 (改訂版) を作成する予定である。

⑨主な学会発表及び論文等 (注: 平成 24 年度研究成果を含む)

学会発表

- 山田洋平・小泉令三・高松勝也 (2013). 教職志望学生を対象とした社会性と情動の学習(SEL-8T)試作プログラムの効果 日本教育心理学会第 55 回総会発表論文集, 321. (法政大学, 2013 年 8 月 18 日)

論文

- ・小泉令三 (2014). 教職志望学生のための社会性と情動の学習 (SEL-8T) の提案 福岡教育大学紀要, **63**(4), 157-165.
- ・山田洋平・小泉令三・高松勝也 (2014a). 教職志望学生の社会的な能力育成プログラム試案(SEL-8T(trial)) の実践効果—学習内容実践化への意識向上と合わせて— 福岡教育大学紀要, **63**(4), 149-156.
- ・山田洋平・小泉令三・高松勝也 (2014b). 教職志望学生の社会的な能力育成プログラム試案(SEL-8T(trial)) の実践効果(2)—改良版 SEL-8T(trial)の試行— 福岡教育大学教育学研究科教職実践専攻 (教職大学院) 年報, **4**, 49-56.

○本報告書は、本学ホームページを通じて学内外に公開いたします。

○本経費により作成された成果物や資料等については、必ず全て添付願います。